

異文化コミュニケーションとドイツ語談話分析

宮内 敬太郎 Keitaro Miyauchi

(河東) 本日は宮内敬太郎先生に「異文化コミュニケーションとドイツ語談話分析」という題で研究をご発表いただきます。お手元にドイツ語がたくさん書かれたペーパーがあると思います。それでは、宮内先生よろしくお願ひします。

1. ドイツ語による対面相互行為と文化的背景

表題の「談話」は言語学、社会言語学、異文化コミュニケーションなどの分野でDialogといったり、discoursあるいはGespräch, KonversationあるいはKommunikationなど様々な用語が使われています。このうちDialogという語は「2人だけの会話」に限定せず、本来「基本的なテーマを構成要素に分解し、対象を論及し、分析、吟味する」という意味のギリシャ語の動詞の名詞形です。ここからヨーロッパで発達した学問の伝統的な思考法には「Dialogには真理が存在する基盤もしくは真実が生じる基盤」という考え方が根底に流れていると考えられます。このことは現実的にドイツでは対話によって、つまり言葉の力で世界の問題が解決できるという考え方をすることとも符号すると思われまふ。つまり対話の中に真理が存在し、事実の解明ができるという観念が、高等教育を受けた階層の間で共通の思考法になっていると言えるわけです。これは古代ギリシャの思考法が今日でも伝統的に継承されていることに端を発していると考えられます。あとGesprächは「ある特定テーマに関する、口頭によるスピーチの交換」(Duden, Deutsches Universalwörterbuch, Mannheim 2001) が本来の意味で、関与する人数についての規定はありません。

ドイツのような異文化社会で公的な次元にしる、プライベートな付き合いにしる、意思疎通を行って最も大きな違いを感じる点は、合理性の認識の仕方から発する価値観と行動様式だと思います。これらは例えば消費行動に現れる金銭や時間に対する経済性の観念、空間の利用の仕方、体面にいかなる重きを置くかといった礼儀作法の違いなど、種々の面に具体的に現れています。

まず合理性の認識の仕方の違いについて具体的な例として、対人関係を社会的・公的な次元の関係か、私的な関係かに二分する。どちらの付き合いにしても自己本位に考え、自分の関心・利益の貫徹を主体的に図るのが一般的な行動様式だと言えます。合理的な思考法が具体化されている事例として、学校、大学など教育の場で、クラスの人数を少なくして、一方的に教えるのではなく、生徒 教員の対等な討論形式でより高次の認識が得られるよう導く制度になって

います。このような合理性は日常の消費行動にも顕著に現れています。例えば何かモノを買う場合、性能や値段などを詳しく店員から聞きだし、比較してから購入するのが一般的。次の会話で店員の対応などにこれら合理性、経済性の発露が見受けられます。ただ競争相手のデパートに品物があるという情報を教える神経はどう説明すべきか。異文化コミュニケーションの観点からは格好のテーマになります。なおほかの店にあるという情報を客に教えるのはドイツではよく経験することです。

Bei Karlstadt (カールシュタット・デパートで。JK = 男性日本人客、VK = 女性店員)

JK : Können Sie mir helfen?

VK : Ja, aber ich muss noch einen Kunden betreuen.

— ca. 10 Minuten später —

JK : Ach jetzt können Sie mir helfen? Ich suche ein Diktiergerät

VK : Ja. Wir haben hier Sanyo und Sony.

JK : Eines ist 199,90 DM, anderes 120,79 DM. Ist der Unterschied der Aufnahmequalität sehr groß?

VK : Da ist der Unterschied nicht so groß. Das von 199,90 ist digital; damit kann man 90 Minuten lang aufnehmen. Mit dem gleichen Preis gibt es jetzt ein neues Modell, autoriverse. Das haben wir aber nicht. Dieses neue Modell von Sony ist bei KaDeWe vorrätig.

JK : Sie meinen bei dem KaDeWe?

VK : Ja.

日本人客はデパートで小型カセットコーダーを探している。近くにいる店員に尋ねようとする、いま他のお客がいるからと断られてしまう。約10分位待つとその店員がやってくる。何事も順番と割り込みは許されない慣習です。録音用MDを探している客に、サンヨーとソニーの製品がありますと説明します。客が、値段は199,90マルクと120,79マルクだけれど、録音の音質に大きな違いがあるのか聞くと、店員は、音質の差は大きくないが、199,90マルクの方はデジタルで90分録音できる。うちには在庫がないが、カーデーヴェー (KaDeWe) にはこれとおなじ値段でソニーのオートリヴァースの新しい型がある、と説明します。これに対して客のほうは他店に在ると言うので、ちょっといぶかって確かめの質問をしているわけです。

次は日本人が昼食にアパート近くの肉屋で立ち食い済ませるために定食を頼む場面です。店に食事を注文する3～4人が行列で待っています (JK = 日本人客, VI = 肉屋の女店員でドイツ語母語者)。

Bei der Metzgerei

JK : Guten Tag!

VI : Guten Tag!

JK : Einmal Kohlroulade bitte.

VI : Zum Mitnehmen oder hier zum Essen?

JK : Zum Hieressen bitte.

VI : Gut, ich bringe jetzt.

JK : Ah, dazu möchte ich eine Suppe, Erbsensuppe oder so etwas.

VI : Können Sie es schaffen? Die Suppe ist eine volle Portion.

JK : Ja?

VI : Am besten essen Sie zuerst das, und danach können Sie entscheiden.

JK : In Ordnung.

— VI bringt die Kohlroulade —

VI : So, 4,48 Euro bitte. Und guten Appetit!

JK : Danke!

日本人客は挽肉の入りのコールルラーデ (Kohlroulade = ロールキャベツ) を注文しました。それに加えてグリーンピース・スープを注文しようとしてしました。すると女性の店員は、そんなに食べきれるか? このスープは1人前のボリュームがある。まずロールキャベツを取って、その後まだ食べられるようだったらスープを注文したらどうか、と薦めるわけです。日本ではお客のほうが上という感じですが、ドイツでは売る側のほうが威張っています。これは客が注文するとき丁寧さを表すbitteを必ず言い添える習慣になっている点にも表れています。

日本人からすれば、客の注文は無条件に受け入れるのが普通でしょう。それに客がレストランや食堂で食べ物を残しても客として他人にとにかく言われる筋合いは無いという感覚です。ところがドイツの社会では今でも食べ物を残すのは悪いと見るのが一般的な感覚です。このような背景を考慮すると、店員として客が食べきれないのに2人前も売るのは不誠実だと思うのかもしれませんが。つまり店としては親切さ = 誠実さのつもりで言っているとも解釈できます。いずれにしてもこの例に限らず、別の買い物でも店側がただ値段の高いものを薦めるのではなく、性能、品質、価格などの比較できる情報を客に説明する対応が一般的です。つまりこの2つの対話からも、社会によって合理性、親切さ、誠実さの理解が異なることが読み取れると思います。

なお「丁寧さ」という意味合いについてももう1つ会話を収録したのですが、そのDialogは省かせてもらいます。これはベルリンの礼儀作法がどうなっているのかと疑問を感じさせる例です。立教大学から研究休暇をもらって、ベルリンの自由大学 (FU) へ行き、理論言語学のリープ教授の研究室に入れてもらうことになりました。これは最初に教授にアポイントを取り、文学部の図書館を案内してもらったときに観察したpoliteness / Höflichkeitの一例と言えます。

ドイツの社会的背景として、ベルリン人はpolitenessに関しては話し方がストレートで、ぶしつけだという定評があります。ただベルリンっ子にこういう一面が見られる反面、バスの運

転手に乗車するときに Guten Tag! などと挨拶をする客が10人のうち7人位はいます。運転手もまたお客の挨拶に応じています。こういう行動も「礼儀正しさ」の一環として把握することができるのではないかなと考えています。

リープ教授は日本から来たゲルマニストに学部図書館を案内するために同行しました。ドイツでは図書館に入る場合はカバン、リュックの類は外部にあるコインロッカーに預ける決まりになっています。ところが日本人の持っていたリュックサックが大きすぎてこのロッカーに入らない。そこでリープ教授は、図書館の入り口の事務員（男性、女性各1名）にどこか置かせてもらえないか尋ねました。しかし事務員2人は教授の問いかけに顔を挙げただけで、何とも応答しません。そこでリープ教授はカウンター越しに職員の側にこのリュックを置きました。そしてそれから20分ほど後に、教授が学部図書館の説明を終えて日本人2人と受付に戻ってきました。教授は自分でリュックを取りました。2人が図書館を出る時も職員2人は無言でした。外に出てから教授は Sehr unhöflich!（「すごい失礼さだ」）、普通だったら挨拶をされたらこれを返す。そしてリュックを置かせてくれと頼んだことに対して、何か言っても良さそうだと憤慨していました。この一幕が linguistic politeness の次元のサンプルとして使えるかどうかの判断はまあ差し控えておきます。

2. ドイツ語 Dialog の分析を手がける目的と意義

以上はドイツ語母語者の対面相互行為を研究対象にする前置きです。次にこの研究の目的と意義を述べておきます。

そもそもの動機はドイツ語母語者と日本語母語者を比べると、言語運用能力の差異が相当あるのではないかという仮定が発端になっています。一方の社会では自分の言いたいことを器用にうまく言い表して人間関係を進めていく。他方の社会では言いたいことがあまり言えなくても結構うまくいく現実があります。これはドイツ語による言語行動の研究から、ドイツ語の言語体系の普遍性と相対性を記述し、これを踏まえて社会と言語、人間の関わりから言語慣用のあり方と思考様式の普遍性と相対性を探り出す方向に発展できると考えます。またドイツ語教育の実用的な観点からは、研究成果を利用して異文化理解を促進することができ、ドイツの社会でのコミュニケーションを行う場合の意識変革、外国語運用能力の向上に結び付けられるはずです。ドイツ語を話そうとする場合、日本語の運用面との違いから、どんなパラメーターを設定したらよいかが表示できるので、思考のいかなる切り換えが必要かを示せば、ドイツ語を話す心理的な障壁をかなり取り払うことができると考えられるからです。

それからドイツ語を対象にして異文化コミュニケーションの研究を行う意義について一言。ドイツ語母語者の異文化視点に立つ研究、特に日本語との対照研究は私の知る限り、まだ殆どなされていない。ドイツ語では対面相互行為で、これから挙げるような要素がどう言語行為などに表れるか殆ど解明されていない。この点、アメリカ英語と日本語の異文化コミュニケーション

ョン研究は60年代後半から比較的なされてきて、ある程度の成果は上がっています。

ではこの研究で何を分析・記述するか具体的に挙げておきます。発言権 (Rederecht)、会話の主導権 (Initierung) はどのような立場にある人が握っているか、面子 (face) の表れ方の諸相として礼儀正しさ (politeness) がドイツ語ではどのように現れるかを特定・解明し、それらが「社会編成体」全体の中でいかなる重要性が置かれているかなどの点に焦点を絞り、記述する必要があると考えています。

3. 対面相互行為と「社会編成体」

一つの言語共同体で展開される相互行為にはその社会の優勢な文化が反映して形成された「社会編成体」(“social organization” Scollon/Scollon, 1997) という組織体が対人関係を円滑に調整するコードとして機能していると想定できます。ではこの組織体にはどのような要素があるか具体的にいくつか挙げてみます。

非言語要素 ノンヴァーバル・コミュニケーション

一つの相互行為でノンヴァーバル・コミュニケーションの要素と言語記号が使われる比率は会話全体の中で75対25%であるという報告がアメリカ英語のコミュニケーション研究の分野から出されています。ノンヴァーバル・コミュニケーションの代表的な要素としては話を聞く際に首を縦にふったり、横にかしげたりする動作、アイ・コンタクト、握手、抱擁、脚を組むなど、それぞれの言語共同体で一定の意味を持つ、定着した手段があるわけです。ちなみにドイツでは対話を行っているさい、話し手の目に視線を向けないでいると、話をまともに聞いていないか、信用しようとするのではないかと一般的に疑われます。逆に話者として相手の目を見ないでしゃべると、何かやましいことがあるか、事実を話していないのではないかと勘ぐられる危険性があると考えるのが一般的と言えます。2003年8月にベルリンなどで行った18回のインタビューでは談話をビデオ・レコーダーで収録しました。これらのインタビューではできるだけ特定の非言語要素に絞り込んで分析しなければと思っています。

口火を切る発言権と会話の主導権

公的および私的な場で複数の人間が同席している場合、誰に口火を切る発言権があるか、会話の主導権はどのような立場の人が握っているか。また話題、会話の方向など主導する権限は誰が握っているか。その場に居合わせた人同士の間で機能する原理が各社会に存在するはずだと考えます。

turn-taking (発話者の交替)、割り込み、発言権の奪い方

発言の交替 (turn-taking) はどのような原理でなされているか、発話中の割り込みは非礼になるか、そうではなくむしろ歓迎されるか、あるいは発言権をどのようなタイミングで奪うか、発話者自身および相手の体面 (face) を傷つけないための配慮はどのようにされるかといった要素を対象にします。これらは各言語共同体でそれぞれ不文律のルールになって機能している

と思われます。

日常の談話あるいは公的な会議で基本的なturn-takingは質問に対する回答という移行により行われます。しかしフランス、北米、モロッコなどイスラム教社会では学会や組織内における討議でも年齢の長幼、社会的な地位などには特に配慮せず、積極的に発言したり、割り込んでいく方がむしろ歓迎されるというのが一般的のようです。ドイツでは、誰か発言をしている時は原則的に割り込むのは失礼とされています。しかし現実的には日常の私的・公的な会話では、発話者が事実と異なることを口にしたり、ちょっと言いよどんだりするとすぐ発言権が奪われてしまう。特に会議や政治的な討議ではこの傾向が強いと言えます。

「合いの手」の入れ方と「自己コンテキスト化」

相手の話を聞く行為もそのテーマへの関心や理解の度合いをfeed backする観点から必要なコミュニケーション行為です。ドイツではアイ・コンタクトをしながら黙って耳を傾けるのが一般的で、相手の話が理解できたり、同意するときは時折Ja, jaと言う。これに対して日本語では頻繁にエーとかハイハイと返事をする光景が目立ちます。この感覚でドイツ語を話すときもついJa, jaとひっきりなしにやってしまう人が多い。するとドイツ側としては、何でも同意されたような気分になったり、イライラする人が多いようです。日本人側のこの対応の仕方は「自己コンテキスト化」の強い表れであると、アメリカと日本の学生集団を対象にした会話研究から報告されています。合いの手の入れ方も文化により異なり、コミュニケーション・ギャップや誤解を誘発しやすい要因になると言えます。

face, linguistic politeness

どの社会でも「面子」もしくは「体面」は対人関係で重要な機能を果たす概念になっているはずですが。この体面はfaceと言い表されています。faceは中国の人類学者Huが1944年に紹介した概念です。faceの観念は個人のself-imageを表現する方法となつて社会的ステータスやprestigeと密接に結びついていると考えられます。ここからfaceの中核的な意味は“honor”(Scollon/ Scollon, 1997, 34) であるという見解が提示されています。ただ「面子」がどういう時に潰されたり、傷つけられたりするかは社会によって違うわけです。例えばドイツの社会ではどうなっているか、日本と比較してどうか、これが研究の対象になっています。

faceの定義らしきものが幾つか挙げられています。まずは(Scollon/Scollon 1997,35) の定義からです。

„Face is the negotiated public image, mutually granted each other by participants in a communicative event.“ (Scollon/Scollon 1997, 35)

Brown/Levinson (1978, 1987) はfaceがnegative face, positive faceの2つの要素から成り立つと見ます。negative faceとは、個々の成人が社会の構成メンバーとして相互行為を遂行するさい、他の構成員によって妨げられたくないという望みを内容とします。これに対してpositive faceは、社会の全ての構成員が何人かの社会の成員から承認、評価を得たいという期待から成

り立ちます。

“Negative face : the want of every ,competent adult member’ that his actions be unimpeded by others. Positive face : the want of every member that his wants be desirable to at least some others.” (Brown/Levinson 1987:62)

例えばイスラム教徒であるBouchara(2002)というモロッコ人の研究者はこのfaceの2つの概念とpolitenessを引っ掛けて、それがドイツ語母語者の間でどう表れるかを調査して、アラブ人の場合と比較しています。

「面子」は“politeness”にも密接に関連する内容を擁しています。politenessを日本語にすると何になるのか必ずしも明白ではないような気がします。「礼儀正しさ」になるのか「丁寧さ」になるのか。例えばドイツ語で話していて、こちらが間違っただけを言うと、ドイツ人はすぐ訂正してきます。しかし日本語でしゃべっていてこれをやると「礼儀」がないとか、「面子」が潰されたとか感じるのではないかと思います。

politenessも各社会で重要な機能を果たしているはずで、それにも拘わらずこの表現に1対1の形で対応する語は多くの言語共同体で存在しないという現実があります (Vgl. Watts et al. 2)。ここから社会、集団によって何がpoliteで、何がそうでないか表象のズレが生じている実態が浮かび上がってきます。例えばアメリカの学生にとっては、特定の状況で“polite”であることと“friendly”は一定の振る舞いの中では密接に相関する。ところが日本の学生には、同じ状況で調査をしたのに「丁寧な」と「親しげな」は異質の次元の概念として理解されている、という調査報告が出されています (Ide et al. 1992, 291ff.)。

ドイツ語を母語としない者がドイツでディスコースに加わる場合、個人的な関与、丁寧さの度合いを表示する相手の呼びかけ方として2人称の親称のduと敬称のSieの使い分けがあり、これに関連してduzen (=「duを使って話す」) しようとして切り出すタイミングなど、人間関係の面で繊細な問題があります。

またpolitenessとfaceが絡んだ相互行為の一例として、ある親友が相談に来て、この解決策でどうだと切り出した場合を想定します。解決策を聞かされた方が、それではまずいと感じた時、相手の名前を「ハンス！」と口に出すか否かで個人的な関与の度合いに大きな差異が生じます。相手の名前を言えば、自分はお前の味方だよ、と友達としての関心が伝わります。呼びかけがないと、相手突き放す意味合いになる。もちろんこれは言い方のイントネーションとの関係もありますが：

Das ist aber keine Lösung, Hans! (好意的な関わりが示唆される。)

Das ist aber keine Lösung. (話者の突き放した態度が伝えられる。)

依頼の仕方 論証の様式

最後に社会編成体が日常的に顕著に表れる次元として依頼などの切り出し方や自己主張を行う様式と、根拠付けの様式を挙げることができます。社会によってそれぞれ代表的な様式が機

能しているという見方は、各社会で優勢な価値観と結びついた思考様式が形成され、伝統的に継承されているという面から説明がつくと思います。具体的な様式としては、ドイツや北部アメリカなどの西ヨーロッパの国々で一般的なパターンとされるもので、最初に要件もしくは結論 (topic) を切り出し、その後で「誰が、何を、いかに」という5W+1Hの面から根拠づけを行うパターンです (=「演繹の様式 („deductive patterns“ / “topic-first”」)。これに対応する話し方は、日本をはじめ中国、韓国など東南アジアで代表的に見られる「Aであり、Bであり、Cである、だから Dである」と結論づける様式だと言われます (=「帰納法的様式 (“inductive patterns”/“topic-delayed”」) (Scollon/Scollon1997,79 ~ 83)。

4. 言語資料

なお分析の言語資料には日本語母語者がドイツ語で行ったインタビュー、それからドイツ語母語者が行ったインタビューを当てることにします。これらインタビューはベルリン、ミュンヘン、ブランデンブルク州、Stuttgart郊外のエーリングゲンなどにおける社会的機関、具体的には小学校、9年制の中・高等学校、特別学校など各種学校、そして福祉施設 (非合法外国人未成年者保護施設、女子教護施設、高齢者養護施設、児童擁護施設、カリタス知的障害者施設) 等で行われた計34本が対象になっています。取材はドイツ語で行われたものが30本、日本語で行われたインタビューが4本あります。日本語のインタビューはドイツ在住20年~30年以上という日本人の音楽家や陶芸家に行われました。このうち18本はビデオに収録され、他はミニディスク・レコーダーによって会話が録音され、収録時間は15分の長さが20本、30~85分が14本となっています。

インタビューで尋ねた事柄は、学校、福祉施設などにおける職業活動に関する7~8種類の質問です。内容的には例えば教育制度の枠組みでは、何を週に何時間教えているか、抱えている難しい問題は何か、主たる目標は何か、例えば知識の伝達が眼目か、あるいは思考力の養成かといった同類の質問を教員もしくは職員にしました。企業の場合はいつからその組織が存在し、従業員数、業務内容、業務がうまく行っている具体例、抱えている難しい問題は何か、改革すべき事項は何かといった質問を行ったわけです。

5. 言語理論

会話分析を手がける方法論には代表的な言語理論として「社会言語学的コミュニケーション分析」(Soziolinguistische Kommunikationsanalyse)、「ディスコース分析」(discours analysis)、「民俗学方法論的会話分析」(Ethnomethodologische Konversationsanalyse)、「会話文法」(Dialoggrammatik=Dialoganalyse)、「ジュネーブ・モデル」(Genfer Modell)等のモデルがあります。

最後の「ジュネーブ・モデル」(=Genfer Schule)は構造主義言語理論の流れを汲み、Goffman

の相互行為理論に代表される社会学とAustinとSearleの語用論、さらに言語哲学O. Ducrotsの論証理論を採り入れた対話分析理論です(Vgl. Sinclair/Coulthard 1975; Moeschler, J. 1994:70)。このモデルでは発話内容まで踏み込んだ明示的分析を手がけています。コンセプトは「会話の線的特性」を概念化していること、それから会話は階層性を形成するという観点から成立っています。「会話の線的特性」に関しては、言語相互行為で一つ一つの発話は関与者が各自で自由に企画できるのではなく、「会話義務」「結束性義務」に拘束された中で生成されるという原理(=「プログラミング」)を柱にしています。また「会話の階層性」という概念に関連して「後行解釈」の原理を導入してもう一方の柱にしています。この原理は、1時点 t_i の一構成素 C_i の階層的、機能的ステータスはそれより後の時点 t_j に変更できるという規定です。この原理は発話されたその時点では上の諸条件に関する整合性と結束性を満たしていない構成素に適用されます(Vgl. Moeschler 1994:81-84)。まず会話を構成する基本的な単位には階位の異なる5種類の「構成素」があります。

- | | |
|------------------------------|----------------------|
| 1. I < Inkursion「会話段落」 | 最大の発話単位で複数の話者間で交換される |
| 2. T < Transaktion「発話節」 | 同質の話題から成る一まとまりの発話単位 |
| 3. E < échange「発話交換」 | 2の「発話節」を構成する単位 |
| 4. I < Intervention「発話列」 | 発話の最大分節 |
| 5. A < acte de langage「発話行為」 | 4の発話の分割可能な最小単位 |

さらに「構成素」は会話展開の主導的機能を担った「主導的構成素」、これに対応する「対応的構成素」、そして両方の機能を持つ「主導的・対応的構成素」に分類します。初めの「主導的機能」とは、談話全体の話題性方向と発語内行為的方向を規定する構成素です。「対応的構成素」はこれに対応する発話で、会話交換を終了させる機能を担う構成素です。「対応的・主導的機能」はこれら両方の機能を担う構成素を指します。これに加えて各構成素の間の統語論的、意味論的、語用論的「整合性」と、構成素間の「結束性義務」を充足する話題性要件、語用論的要件の充足度を測る基準として下の4条件を導入します。

1. CT < condition thématique = 「話題性条件」
対応構成素は主導構成素と同じ話題に関連させる義務を持つ
2. CCP < c. de contenu propositionnel = 「命題性条件」
対応構成素は主導構成素に対して意味論的に反意、含意等の関係を持つ義務を持つ
3. CI < c. illocutoire = 「発語内行為的条件」
対応構成素の発語内行為に関するタイプを規定する
4. COA < c. d'orientation argumentative = 「論証方向性条件」
対応構成素は主導構成素と同一の論証方向性を持つ義務を有する

これらの4条件に加えて主導的な構成素に応ずる構成素の話題性、論証的關係、論証的方向性に関する結束性義務の充足度を測る基準としてさらにCT「話題性条件」、CRA「論証的關係条

件」、COA「論証方向性条件」の3種類の「義務」条件を課しています。

以下で示した対話分析は今年初めの紀要に出したものの一部です。本来ならこの夏にベルリンなどでビデオを使って取材したインタビューの分析をしなければならないのですが、まだ仕事はそこまで進んでおりません。そこでこういう装置を使って分析をこのような方向で行うということを一応示しておきたいと思います。

6. インタビュー会話の機能的解釈と階層構造

下で示した分析資料は2002年4月11日にベルリンのクロイツベルクにある小学校で校長先生と女性教員の計2人を相手に行われたインタビューの一部です。この会話を分析資料に選んだ理由は、一組織内で上下の関係にある2人が取材に応じてくれたので、これにより役職の違いによる種々の社会編成体が具体的に表れると予測したからです。全体の取材時間は20分で、収録語数は約4,300語になります。

<Transkriptionskonventionen>

... : Textauslassung (-), (--), (---) : kurze oder mittlere oder lange Pausen von ca. 0.25 ~ 0.75 Sekunden, bis zu ca.1 Sekunde ? : stark ansteigend

M 1 : ...Und wie viele Lehrer oder Lehrerinnen hier also
insgesamt sind fest angestellt? +CT - CCP +CI - COA

Gm1: Hier bei uns in der Schule? +CT +CCP +CI

M 2 : Ja. +CT

Gm2 : Da haben wir 43 bei (-) ja die 43 sind nur ein bis sechs,
43 bei 520 Kindern etwa. +CT - CCP +CI - CRA

...

M1の...は省略された発話分節のことです。Mは日本人取材者で、Gmはベルリンの小学校の校長先生の意味です。M1, Gm1の数字はM, Gmの発言順序です。M1の質問はテーマ性に関しては専任教員の数を聞きだす意図で疑問文となり、「話題性条件」=CT、「発語内行為的条件」=CIの整合性は良好と言えます。しかし「命題性条件」=CCPと「論証方向性条件」=COAに関しては統語論的、意味論的な整合性が取れていないと解釈できるため、良好とは言えません。つまりこの副詞hierはより具体的にhier an der Grundschuleと規定すべきであったと言えます。それと接続詞はoderでなくundと言うべきでした。これらCCP, COAの整合性が良くない点はさらに次のGm1からも立証できます。つまりM1に曖昧さがなければ、Gm1の質問はなかったと考えられるわけです。以上の点からCCPに関する解釈は否定的な判定 „-“ になります。M2のJaはGm1の確認の質問に対する肯定の返事と理解でき、話題性に合致しています。そこでM2の対応の「話題性条件」は+CTと分析できます。Gm2の520名の児童に専任教員の数が43人と

ラスト・ネームという順序になります。話し言葉では、例えばテニスクラブでの付き合いなどでは初対面の紹介などでもマリア、ペーターのようにファースト・ネームだけで、苗字まで言わない方が多いという状況はあります。

川崎：私の場合はファースト・ネーム、ラスト・ネームの順なんですけれども……どうしてラストネーム、ファーストネームの順になったのかなあという理由の1つに、もしかしたら中国、韓国をひっくり返さないベトナム、それに日本が引っ張られているんじゃないかという気がするんですけども……。

佐藤：それともやはりその国の文化の中でできたものを英語なら英語式に表そうという意識が表れていると考えられるのではないのでしょうか。我々が外国へ行って、自分の名前をひっくり返して自己紹介するというのは、ある意味で明治以来の我々の西欧に対する崇拝意識そのものが残存しているように最近思えてきましたね。どんなもんだろうかなあ最近悩んでいるんです。坂田先生はこの前行かれてどうでしたか？

坂田：敬語を表現した使い方をしていきますからね。知り合いと話すときはファースト・ネームですよ。Professor Sakataと知り合いでない場合は言いますよ。ファーストネームから先に言うふうにならなってきたから急に換えられない。変える必要性がないんじゃないか。日本人はラスト・ネームが先ですよって、いちいち言わないといけないような感じがしませんか？ 煩わしいから。

宮内：ちょっと違う問題でベルリン自由大学の日本語学者であるキルシュネルトが5～6年前に朝日新聞に書いていました。日本は作家なり人の名前の表記を統一して欲しいと。ドイツで日本語から翻訳された出版物で名前が先のと苗字が先のと混ざっていて混乱している、という指摘をしていました。ドイツの書店でも実際、川端康成の翻訳を探して貰う際、Yasunari Kawabataと言っても分からなかったです。本の表紙にはKawabata Yasunariという順に書かれていますから。

川崎：日本研究のアメリカ人からのE-Mailは「川崎先生」という書き方が多いんですね。ポジティブに解釈すると相手に合わせるポライトネスじゃないかなあと思う。英語を話している時に相手の文化に合わせるというか、相手のやり易い流儀で言ってやるんだという感覚。逆に日本研究の人は、日本のことを良く知っているから、E-Mailで書くんでも最初の切り出しがDear Kawasaki先生となっているんじゃないかと思っています。

佐藤：実はね、数年前は逆に考えていたんですよ。日本に来たんだから、西欧じゃないんだから、逆にしると。例えばジョージ・ブッシュなら、日本語だったらブッシュ・ジョージと書けと思ったんですよ。実はそうやったんです。そうやったんだけども、どうも向こう側の最近の動きが逆だということに気づきまして。つまりその人の本国のカルチャーに合わせて名前を使うのがポライトネスであるという感じを受けたんですよ。それはアメリカにおける、性差別をあからさまにした言語を使わない、という動きと連動している。つまり、例えばeveryoneを所

有形で受けるとき、昔のように単にhisとは言わずに、his and herと言ったり、あるいはtheirとか言ったりする、つまり男性中心主義をなくすという主旨です。つまり、自分の立場から発せられた言語感覚に相手を無理に合わせてしまう、という態度への反省です。相手との距離、相手の特殊性を認めることから始める。ドイツ語でも、最近では以前のようにはすぐさま親称のduを使うことが少なくなったと聞きました。敬称のSieを用いて、一定の距離があるほうが良いのだと言う。逆に言うと、相手とは距離があるということをもそのまま承認して話す方が通じるのかなと思うんです。このあたり、世界的な傾向じゃないかなと思います。数年経って逆の方向に揺れるということがあるのかも知れませんが、今のところでは私のE-mailの署名もSato Migakuで出してあります。

坂田：ビデオとかテープレコーダーとかをドイツへ持っていかれるでしょう。インタビューが15とか合計で30本とか取材されています。それはどういう基準で相手とかを選ぶのですか。若者がヘンなことを言って新しい言語を作っているとかそういう傾向はないんですか。

宮内：方法論的に非常に核心を突いている質問ですね。対話の内容が比較対照できないといけないので、今回は18本とも同じ職業の人に対して、同じ質問をするように心がけました。相手は世代も同じ方が比較し易いのですが、意図的に違う世代の人を対象にすれば、比較対照する別の軸を設定できることになります。ただその場合は資料体をたくさん増やさないといけない。この世代の人はこういう話し方をする、別の世代ではどうだとか。例えば、根拠づけを行う接続詞weilに導かれる文は、人称変化した定形を文末に置く規則になっています。しかしZeitschrift für Sprachwissenschaftという言語学の論文雑誌で、Gohl, Chr./Günther, S. (1999) の2人はこの定形を前から2番目に置く話し手が増えている、と主張しています。この点、僕がインタビューを行ったミュンヘンの老人養護施設の所長（男性、50歳前後）と日本の経営学で博士号を取った編集業務をしている女性（40歳位）も時々これをやっていることに気づきました。ただ僕の資料体の中ではこの2人だけで、しかも常にそう話すわけではないのです。ですからベルリンで日常的に他の人たちと接触している限りでは、こんな構文を口にしたら誤りとされてしまう。つまりこの説には反論できるかなあという感じでした。ところが僕が相談したベルリン自由大学の理論言語学のリープ教授はこういう傾向が現れてきたという前提に立っておられる。ただ僕の今回の研究目標はこういう点に置いているのではなく、例えばpolitenessやfaceはドイツ語や日本語でどうなっているか、論証を行うか否か、するとすれば初めに結論を口にするか、根拠付けが先かといった問題設定です。こういう問題になると同じ階層の人に同種の質問をしたほうが比べやすい。やはり社会言語学的な方法論を立てて厳密にやらないといけないと考えます。

河東：先生のご研究から逸れてしまうと思うんですが、20年程前アメリカでアップ・トークとか日本で言うところの「～とか」「like」に対応する言い回しが若い人の間で生まれてきたというのを新聞で読んだことがあります。ドイツでもそういう現象が起こっていますか。

宮内：いわゆる「若者言葉」とか「流行語」というのはどこの社会でもあると思います。若者言葉はドイツ文学科で教えている時に研究テーマに選ぶ学生がいました。日本の場合はこういう言葉使いは3～4年サイクルで変わっている感じがします。ドイツの場合はスパンがもう少し長い感じがします。特に中・高校生が英語を若者言葉に取り入れたりとか……ある家庭に招待されて高校生と一緒に座っていて、自分の親と話しているのを聞いても僕など殆ど分からないんです。彼女 / 彼が僕に話しかけるときは標準語を使ってくれるので大体分かるのですが。日本の流行語の変化の速度はすごいなと思います。

河東：ダイアログの中に真理があると。それを基本にしています。アップ・トークは別にしてもドイツ流の「～とか」なんか真理を見つけようとする態勢自体が変わっていつてるのかなあと……。

宮内：最近、若者の言葉ではやっている表現の中にはEcht! [エヒト]があります。これは元来「真性の」を意味する形容詞です。これを「ホント？」位の間投詞としてよく口にする。日本語の「マジ」がいつのまにか大人にも浸透している現象です。日本語の場合はなるべく短縮しようとする傾向が強いと思います。ドイツ語の場合はそれほどではない。それよりもできるだけ真理を突いた言い方を考え出そうとする傾向があると思います。

坂田：ペーパーの3ページのグラフみたいなものは何ですか。

宮内：3ページのM1 (= 本稿p179の図) というところは、日本人インタビューが、その学校には教員が何人雇われているかという質問をしています。後の会話全体はこの質問に引きずられていると見なせます。それが階層的に一番上の支配的な位置にあるということを示しています。あと質問の仕方はどうだったか、答え方はどうだったか、話題性はどうか、これらを一定の基準に照らし合わせて吟味して充たしているという判断が右端に示されています。一番最後の - COA というのは「論証方向性基準」という条件で、構文、意味論的に非文であると判定してマイナスになっています。これが実証されるのは小学校の校長先生であるGM1の発話で、「この小学校のことですか」と聞き返しています。同様にCT, CCP というのも分析する装置の一部で、これらの条件に基づいて判定するということです。社会学や社会言語学では相変わらず同じ次元の言葉で説明する方法論ですが、それでは納得のいく記述はできないという意識で、去年1年ベルリンで海外研究員をさせて貰っている時に、こういうモデルの研究を行ったわけです。もちろんこのモデルにもまだ何点か問題があるんですが、これが僕の今の段階なんです。

河東：他に質問はありませんでしょうか。……本日は宮内先生どうもありがとうございました。

文 献

Bouchara, Abdelaziz (2002) : Höflichkeitsformen in der Interaktion zwischen Deutschen und Arabern, Reihe Germanistische Linguistik; 235, Tübingen.

- Brown, P./Levinson, C.S. (1987 [1978]) : Politeness. Some universals in language usage. Cambridge Univ. Press.
- Gohl, Chr./Günther, S. (1999) : Grammatikalisierung von *weil* als Diskursmarker in der gesprochenen Sprache. In: ZS 18.1, 39-75.
- Henne, H./Rehbock, H. (2001): Einführung in die Gesprächsanalyse. Berlin/New York.
- Ide, S. et al. (1992) : The Concept of Politeness. In: Watts, R. J. et al. (ed.) : Politeness in Language, Berlin/New York.
- Kühn, Christine (2002) : Körper-Sprache, Elemente einer sprachwissenschaftlichen Explikation non-verbaler Kommunikation, Frankfurt a. M.
- Lieb, H. -H. (1996) : The Semantics of German *und*. In: Travaux du Cercle Linguistique de Prague, NS 2, Amsterdam/Philadelphia, 157-176.
- メイナード、S. K. (1998 [1993]) 「会話分析」、くろしお出版、東京
- Moeschler, J. (1994) : Das Genfer Modell der Gesprächsanalyse. In: Fritz, G./Hundsnurscher, F. (Hrsg.) : Handbuch der Dialoganalyse. Tübingen, 69-94.
- Schwitalla, J. (1979) : Dialogsteuerung in Interviews, Ansätze zu einer Theorie der Dialogsteuerung mit empirischen Untersuchungen von Politiker-, Experten- und Starinterviews in Rundfunk und Fernsehen (Heutiges Deutsch I / 15), München.
- (1994) : Gesprochene Sprache - dialogisch gesehen. In : Fritz, G./Hundsnurscher, F. (Hrsg.) : Handbuch der Dialoganalyse. Tübingen, 17-36.
- Scollon, R./Scollon, W. S. (1992) : Intercultural Communication. Massachusetts, USA /Oxford OX 41JF. UK.
- Watts, R. J. et al. (ed.) (1992) : Politeness in Language. Berlin/New York. In : Winter, W. (ed.) : Trends in Linguistics. Studies and Monographs 59.